

福岡大学

スポーツ科学部

大学院スポーツ健康科学研究科

年報

平成 29 年度 (2017)



福岡大学スポーツ科学部

第 3 号

福岡大学

スポーツ科学部

大学院スポーツ健康科学研究科

年報

平成29年度(2017)

福岡大学スポーツ科学部

第3号

目次

挨拶	1
活動内容	
1 学部および研究科の三つのポリシー	
(1) スポーツ科学部	3
(2) スポーツ健康科学研究科	7
2 2017年度 活動年譜	9
3 教員組織および担当者	11
4 入試状況、学生数及び卒業生数、出張講義	
(1) スポーツ科学部	14
(2) スポーツ健康科学研究科	16
5 教育活動	
(1) 入学前教育	17
(2) 新入生懇談会	17
(3) クラス面談・修学指導	19
(4) フレッシュマンセミナー授業方法	21
(5) ステップアップセミナー授業方法	22
6 FD・SD 活動	
(1) シラバス点検	24
(2) 学外研修参加	24
(3) ワークショップ、研修会の開催	25
(4) 授業アンケート	26
7 地域連携、社会貢献、広報推進	31
8 国際交流、高大連携	33
9 教職課程教育	34
10 研究科教育活動状況	36
11 就職・進路	
(1) スポーツ科学部	37
(2) スポーツ健康科学研究科	38
12 外部獲得資金実績	39
13 関連資料一覧	41

学部・研究科の魅力発信

スポーツ学部長 田中 守

スポーツ健康科学研究科長 檜垣 靖樹

スポーツ科学部とスポーツ健康科学研究科では、2015年度版から学部と研究科の年間活動を総括し、記録に残すとともに学内外にその成果を公表する目的で、一昨年（2016年）秋「スポーツ科学部・スポーツ健康科学研究科年報」を創刊しました。今年は、2017年度版（第3号）になります。学部・研究科教員の研究活動（研究業績）と社会活動、競技・指導活動は「スポーツ科学研究（大学研究紀要）」に、また現在学部として取り組んでいる教育プログラムの「体育・スポーツのエキスパート育成プログラム」と「ココロとカラダのウェルネスプログラム」は別冊あるいはスポーツ科学部ホームページ上の電子ファイルとして詳細を掲載していますので、本年報（第3号）はこれら以外の内容になります。具体的には、目次をご覧ください。

スポーツ科学部は、1969年（昭和44年）体育学部体育学科として学生定員100名で創設されました。その後、学生定員増（臨時定員増を含め）を何度か経て現在の学生定員295名となっています。1998年（平成10年）スポーツ科学部への名称変更とともにスポーツ科学科と健康運動科学科の2学科へ改組転換し現在に至っています。2018年（平成30年）3月時点で、292名の卒業生を加えて総数11,081名を輩出しています。

スポーツ健康科学研究科は、1990年（平成2年）体育学研究科体育学専攻修士課程として6専修部門（体育学、体力学、スポーツ医学、体育科教育学、コーチ学、健康運動学）を創設しました。2003年（平成15年）にスポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻に改称し、現在6部門13専修となっています。また、2004年（平成16年）にはスポーツ健康科学専攻博士課程を2部門（健康運動科学、スポーツトレーニング科学）増設しました。2018年（平成30年）3月18名の修了生を加えて総数422名の修了生（修士課程386名、満期退学者を含む博士課程36名）、17名（2017年度は4名）の課程博士と2名の論文博士を輩出しています。

2013年（平成25年）12月から学部役職員の変更に伴う新体制がスタートし、“**学部の魅力づくり**”をテーマに、“**FUSS アクティブプラン（福岡大学スポーツ科学部推進計画）**”の名称で取り組んでいます。スポーツ・健康運動に関する分野において社会を先導する高い専門性と気概を持った人材の育成（教育面）に加えて、これを実現できる教育環境づくり（教育組織、FD・SD）、並びに教育や社会に資する研究環境の整備（研究面）を推進し、さらに近未来に向かって学部が独自に取り組む特別プロジェクトを推進し、もって“**学部の魅力づくり**”を目標としています。

2017年度（平成29年度）の取り組みとして、上半期に本年報第2号（2016年度版）の作成に取り組む秋に刊行しました。2017年2月に竣工した総合体育館（第一記念会堂の移設）での学部専門科目「専門実技」や共通教育科目「生涯スポーツ演習」が4月からスタートしました。施設として、2017年7月から2018年2月まで第二記念会堂の耐震工事とフロア全面張替え、卓球場

跡に講義室とゼミ室・スポーツ栄養学実験室を改築、そして本学部の意向が大きく反映された日本水泳連盟公認プールの移設（建設）も決定（2017年5月理事会）しました。その他、大学からの支援を受けて実施している「体育・スポーツのエキスパート育成プログラム」や「ココロカラダのウェルネスプログラム」、学部ホームページの充実、教員現役合格率・健康運動指導士合格率アッププロジェクトや国際スポーツ人材育成派遣プロジェクトなど、継続的な教育活動、地域・社会貢献活動、国際交流活動、高大連携活動、就職・進路支援活動等を行いました。特に、教員現役合格率アッププロジェクトの成果、2017年度は例年の2倍になる8名の現役合格者を出すとともに、卒業生も38名を越える合格者となりました。釜山大学との大学院国際学術交流も2017年度で6回目になりました。また、これらの魅力を学内外に発信すべく、学部ホームページのリニューアルに2018年2月から取り組んでいます。

一方、人事に関して、脳神経外科がご専門の重森裕准教授と保健体育科教育学がご専門の梅田保人特任教授が4月から採用され、新助教5名、新助手3名も採用されました。また、田場昭一郎講師、野口安忠講師、坂本道人講師が4月に准教授に昇格されました。2018年3月に退職された田中宏暁教授（スポーツ生理学）には48年間に亘る永年のご功績が評価され名誉教授の称号が授与されました。本学部・研究科へ多大なご貢献をいただきました田中宏暁教授に書面をお借りし感謝申し上げます。

本学では、1996年（平成8年）から大学基準協会の「大学評価マニュアル」に基づき、自己点検・評価を開始しました。その後、自己点検・評価の実施と結果公表の義務化に伴い2000年度（平成12年度）に第2回目の自己点検・評価を行いました。2004年（平成16年）からは第三者機関（認証評価機関）による認証評価を7年に1回受けることが義務付けられ、本学では2007年度（平成19年度）に第3回目、2014年度（平成26年度）に第4回目の自己点検・評価を行い、翌年“大学基準協会に適合”との認証評価を受けました。2015年度（平成27年度）からは毎年自己点検・評価を行うことになり、本年報が学部基礎データ調書資料としても活用できています。

1 学部および研究科の三つのポリシー

(1) スポーツ科学部 三つのポリシー

❖ アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

スポーツ科学部は人材養成の目的を達成するために、

1. スポーツを日常的に実践している人
2. スポーツや身体運動を対象に積極的に科学しようとする人
3. 競技スポーツにおけるパフォーマンスの向上を目指す人
4. 体育教員、スポーツコーチ、インストラクター、健康運動指導士などスポーツや健康全般にかかわる職種を目指そうとする人の入学を求めています。

❖ カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

スポーツ科学部のカリキュラムは、ディプロマ・ポリシー（DP）に示した人材を育成することを目的として編成されています。

そのためのカリキュラムとして、1年次より共通教育科目とともに基礎的な専門教育科目を配置し、学年が進むにしたがって学生個々の興味と関心に基づいて選択できる専門教育科目を多くしています。また、1年次から就職等の進路を視野に入れて意図的、計画的に専門教育を進めることができるように、一部選抜制を含む推奨コースを設定しています。さらに、実技科目や演習科目は、理論と実践を統合した教育を体系的に行うために、少人数のクラスによる双方向の授業形態を多くとっています。

スポーツ科学科は、自らが専門とするスポーツ種目の技能およびスポーツ全般にわたる科学的指導能力の向上を、また健康運動科学科は、健康運動・レクリエーションの科学的基礎知識に基づく実践・指導能力の習得をそれぞれねらいとし、各学科の特性にあったカリキュラムを編成しています。

❖ ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

スポーツ科学部の教育課程においては、以下に掲げる能力を備え、厳格な成績評価のもとで所定の単位を修得した学生に卒業を認定し、学位を授与します。

1. スポーツや運動全般の科学的指導能力を備えている。
2. 専門とするスポーツ・運動の高い技能と指導能力を備えている。
3. スポーツ・運動の医科学的知識に基づく卒業論文作成能力を備えている。
4. スポーツ・運動を通じて得られた社会や職業活動に必要なコミュニケーション能力、課題解決力、倫理的思考力を備えている。
5. 人文科学、社会科学、自然科学および外国語の幅広い知識と教養を身につけている。

■ **スポーツ科学科**

＜養成する人材像・教育課程の特色＞

スポーツ科学科は、競技力や運動能力の向上を目指したスポーツ医科学分野の知識を有し、適切なスポーツの実践と論理的指導ができる人材を養成することを目的としています。そのために、スポーツ・運動に関する理論と実践を統合した教育科目を体系的に配し、学生の興味・関心及び

卒業後の進路に対応した 4 つのコースを用意しています。自身の競技力向上とアスリートやコーチを目指すためのアスリート・コーチコース、アスリートのサポートを担うためのトレーナーコース、現役で中学校・高等学校の保健体育教員採用試験合格を目指すための保健体育教員コース、地域社会における幅広いスポーツ指導者として活躍するための生涯スポーツ教育コースがあり、多様な社会ニーズに対応したスポーツ科学の在り方を探求しています。

スポーツ科学科 三つのポリシー

※アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

◇知識・理解

競技スポーツを科学的に捉えるための基礎学力を有している人

◇技能

競技スポーツの経験を有し、競技力向上のために科学的に課題を分析できる人

◇態度・志向性

スポーツの場面以外でも、スポーツの精神を体現化し、スポーツの素晴らしさを伝えたいと考える人

◇その他能力・資質

学校生活全般でリーダーシップ・コミュニケーション能力を発揮した人や英語資格の取得等に努めた人

<入学者選抜のねらい>

スポーツ科学科では、競技スポーツの実践経験と高等学校までの学びを融合させ、競技力向上を目的とするスポーツ科学の発展に寄与しようとする人材を広く受け入れます。

そのため、これまでに培われた学力、活動や経験を通じて身につけた能力、資質、学ぶ意欲などを、多面的・総合的に評価する多様な入学試験を実施します。

※カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

本学位（教育）プログラムのカリキュラムは、ディプロマ・ポリシー（DP）に示した「知識・理解」「技能」「態度・志向性」を備えた人材を育成することを目的として編成されています。

そのためのカリキュラムとして、1 年次より共通教育科目とともに基礎的な専門教育科目を配置し、学年が進むにしたがって、学生個々の興味と関心に基づいて選択できる専門教育科目を多くしています。また、1 年次から就職等の進路を視野に入れて意図的、計画的に専門教育を進めることができるように、一部選抜制を含む 4 つの推奨コース（アスリート・コーチコース、トレーナーコース、保健体育教員コース、生涯スポーツ教育コース）を設定しています。カリキュラムの中に各コースの推奨科目群およびコース共通科目群を設け、早くから専門的知識や技能を体系的に習得できるようにしています。

スポーツ・運動の理論と実践を統合した教育を体系的に行うため、「スポーツ科学演習」「卒業研究論文」などの演習科目は、少人数のクラスによる双方向の授業形態を多くとっています。実技科目については、自らが専門とするスポーツ種目を学べるように、選択必修の実技科目を多く配置しています。そして、「スポーツ実習Ⅱ」や「コーチ法演習」などの科目では、専門とするスポーツ種目のコーチング理論を深めるとともに、リーダーシップ・コミュニケーション能力および倫理的思考力の育成も行っています。

❖ ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

【知識・理解】

- A-1 スポーツ・運動の医科学的基礎知識について理解し、説明できる。
- A-2 専門とするスポーツの技術構造について理解し、説明できる。
- A-3 専門とするスポーツの指導方法について理解し、説明できる。
- A-4 人文科学、社会科学、自然科学および外国語の幅広い知識と教養を理解している。

【技能】

- B-1 専門とするスポーツの技術を習得し、競技等の場面において発揮することができる。
- B-2 専門とするスポーツの技術構造や指導方法に関する知識や理論に基づいて指導することができる。
- B-3 スポーツ・運動を通じてリーダーシップ・コミュニケーション能力を身につけ、発揮することができる。
- B-4 スポーツ・運動を通じて倫理的思考力を身につけ、発揮することができる。

【態度・志向性】

- C-1 スポーツ科学の発展に貢献しようとする意欲を持っている。
- C-2 スポーツ・運動について自ら課題を発見し、解決する意欲を持っている。
- C-3 スポーツ・運動を論理的に説明する意欲を持っている。
- C-4 スポーツ・運動を通じて地域社会に貢献する姿勢を備えている。
- C-5 スポーツ・運動についてマネジメント等に取り組む意欲を持っている。

■ **健康運動科学科**

<養成する人材像・教育課程の特色>

健康運動科学科は、心身の健康の回復や保持増進を目指した医科学分野の知識を有し、創造的・実践的な指導ができる人材を養成することを目的としています。そのために、健康運動・レクリエーションに関する理論と実践を統合した教育科目を体系的に配し、学生の興味・関心及び卒業後の進路に対応した 3 つのコースを用意しています。健康運動関連資格取得を目指す健康運動指導者コース、現役で中学校・高等学校の保健体育教員採用試験合格を目指すための保健体育教員コース、地域社会における幅広いスポーツ指導者として活躍するための生涯スポーツ教育コースがあり、多様な社会ニーズに対応した健康運動科学の在り方を探求しています。

健康運動科学科三つのポリシー

❖ アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

◇知識・理解

生涯スポーツを科学的に捉えるための基礎学力を有している人

◇技能

生涯スポーツの経験を有し、健康の回復や保持増進について科学的に分析できる人

◇態度・志向性

スポーツの場面以外でも、スポーツの精神を体現化し、スポーツの素晴らしさを伝えたいと考える人

◇その他能力・資質

学校生活全般でリーダーシップ・コミュニケーション能力を発揮した人や英語資格の取得等に努めた人

<入学者選抜のねらい>

健康運動科学科では、生涯スポーツの実践経験と高等学校までの学びを融合させ、健康の回復や保持増進を目的とするスポーツ科学の発展に寄与しようとする人材を広く受け入れます。

そのため、これまでに培われた学力、活動や経験を通じて身につけた能力、資質、学ぶ意欲などを、多面的・総合的に評価する多様な入学試験を実施します。

❖カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

本学位（教育）プログラムのカリキュラムは、ディプロマ・ポリシー（DP）に示した「知識・理解」「技能」「態度・志向性」を備えた人材を育成することを目的として編成されています。

そのためのカリキュラムとして、1年次より共通教育科目とともに基礎的な専門教育科目を配置し、学年が進むにしたがって学生個々の興味と関心に基づいて選択できる専門教育科目を多くしています。また、1年次から就職等の進路を視野に入れて意図的、計画的に専門教育を進めることができるように、一部選抜制を含む3つの推奨コース（健康運動指導者コース、保健体育教員コース、生涯スポーツ教育コース）を設定しています。カリキュラムの中に各コースの推奨科目群とコース共通科目群を設け、早くから専門的知識や技能を体系的に習得できるようにしています。

健康運動・レクリエーションの理論と実践を統合した教育を行うために、「スポーツ科学演習」「卒業研究論文」などの演習科目は、少人数のクラスによる双方向の授業形態を多くとっています。また、健康運動・レクリエーションに関わる実習科目や演習科目では、現場の実践に即した科学的指導能力やマネジメント能力を高め、地域社会に貢献する態度を身につけられるようにしています。

❖ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

【知識・理解】

- A-1 健康運動・レクリエーションの医科学的基礎知識について理解し、説明できる。
- A-2 健康運動・レクリエーションの技術について理解し、説明できる。
- A-3 健康運動・レクリエーションの指導方法について理解し、説明できる。
- A-4 人文科学、社会科学、自然科学および外国語の幅広い知識と教養を理解している。

【技能】

- B-1 健康運動・レクリエーションの技術を習得し、運動指導等の場面において発揮することができる。
- B-2 健康運動・レクリエーションの技術や指導方法に関する知識や理論に基づいて指導することができる。
- B-3 健康運動・レクリエーションを通じてリーダーシップ・コミュニケーション能力を身につけ、発揮することができる。
- B-4 健康運動・レクリエーションを通じて倫理的思考力を身につけ、発揮することができる。

【態度・志向性】

- C-1 健康運動科学の発展に貢献しようとする意欲を持っている。
- C-2 健康運動・レクリエーションについて、自ら課題を発見し、解決する意欲を持っている。
- C-3 健康運動・レクリエーションを論理的に説明する意欲を持っている。
- C-4 健康運動・レクリエーションの技術を通じて地域社会に貢献する姿勢を備えている。
- C-5 健康運動・レクリエーションについてマネジメント等に取り組む意欲を持っている。

(2) スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻（博士課程前期・後期）

＜人材養成および教育研究上の目的＞

スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻は、運動、スポーツ、レクリエーション、レジャー、体育、健康、福祉等を対象とする学問の深化を図り、新しい世紀のウェルネス社会実現に向けて貢献し、高度なスポーツ知を拓く研究科として機能することを教育理念とする。博士課程前期では、競技スポーツ・学校体育・地域スポーツ・医療等の指導現場において高度な知識と技術を基に、体育・スポーツ・健康・レクリエーションに関する科学的指導を実践・応用できる専門家の養成を行う。博士課程後期では、健康増進や疾病・障害の治療・予防・再発防止を目的とした運動プログラムの開発・実践に関する研究や、幼少期から高齢期に至るライフステージに応じたスポーツパフォーマンスの向上を目的とした研究などの専門的な領域について自立して研究活動を行い得る研究者を養成する。

スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻三つのポリシー

❖アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

本研究科は、博士課程前期では、指導現場において科学的指導を実践・応用できる人材を育成するという観点から、

- 1) スポーツや運動を科学的観点から研究することに興味のある人
- 2) 競技スポーツにおいてパフォーマンスを向上させる科学的方法に興味のある人
- 3) 教育の現場でより高度な科学的成果を取り入れようとしている人
- 4) 医療現場で運動により健康の維持や疾病の予防しようとする人

の入学を求めている。また、博士課程後期では、高等教育機関あるいは研究機関において独立して研究できる人材を育成するという観点から、

- 1) 基礎的な学力を有し、創造的で柔軟な発想を持ち、研究を遂行することができる人
- 2) 博士課程前期では十分な研究成果を得られず、研究を継続することを望む人
- 3) 医療や健康増進に強い熱意がある人
- 4) 広く自分の研究成果を国外にも発信したい人
- 5) スポーツ・体育分野の出身者以外にもスポーツや健康を科学的に研究することに興味のある人の入学を求めている。

そのため、体育、体育・スポーツ科学関連学部の卒業生のみならず、広範囲からの領域の学生の受け入れを目指している。特に、社会人や外国人は積極的に受け入れる。

❖カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

博士課程前期では、各自の専門性を高めるために、部門ごとに「特別研究」と「特講」などの専修科目を設置し、同時に、関連する領域の知識の獲得を意図した非専修科目が配置している。特に、スポーツ医学部門では講義科目と対応した実習科目が用意されている。さらに、論文指導教員全員によるオムニバス形式の科目は部門の枠を越えて幅広い知識の獲得を目指している。

博士課程後期では、博士論文指導を目的とした「特別研究」以外にも、全論文指導教員および論文指導補助教員によるオムニバス形式の科目を配置し、基本的なリサーチメソッドの獲得に資している。

❖ ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

博士課程前期では、修士論文の完成度を高めるために中間報告会での発表と、外部からの評価を受けるために関連学会での発表を義務づけている。博士課程後期では、最終論文提出の半年前に中間報告に相当する研究計画書の提出・審査を義務づけている。また、博士論文の外部からの評価を受けるために国際誌あるいは全国誌への掲載を義務づけている。

これらの修了要件により、博士課程前期では指導現場において科学的指導を実践・応用できる専門家としての進路選択に資することができ、博士課程後期では高等教育機関あるいは研究機関において自立して研究活動を行える研究者を養成する。

2 2017年度 活動年譜

--

2017年		【学部】	【研究科】
4月	1日	入学式	入学式・新入生ガイダンス
	2日	新入生ガイダンス	
	3日	新入生懇談会	
		ステップアッププログラム	
		先輩と語る ー大学と社会ー	
	10日	前期授業開始	前期授業開始
5～6月		修学指導	
6～7月		父母懇談会（本学・各地）	
7月	8日		大学院推薦入試
	10～24日	前期授業アンケート	
	25日	前期授業終了	前期授業終了
	26日	前期定期試験開始	
	31日		修論中間報告会
8月	4日	前期試験終了	
	4日	夏季休業開始	夏季休業開始
	5日	オープンキャンパス	オープンキャンパス
	7日	前期集中授業開始	
	5～8日	プール実習	
	7～9日	ゴルフ実習	
	11日	前期集中授業終了	
	8日	AO入試特別講座①	
	9日	AO入試公開練習会①	
	16～20日	キャンプ実習（前段）	
	22日	AO入試特別講座②	
	23日	AO入試公開練習会②	
	29～2日	キャンプ実習（キャンプⅡ）	
	9月	5日	
5～8日		海浜実習	
6～10日		キャンプ実習（後段）	
13日		夏季休業終了	
14日		後期授業開始	後期授業開始
30日		前期卒業式	学位記授与式（修士）

10月	5日		学位記授与式（博士）
11月	21・22日 25日	A方式推薦入試	釜山大学との学術交流会
12月	9日 11～26日 27日	ステップアッププログラム 先輩と語る -大学と社会- 学部祭 後期授業アンケート 冬季休業開始	冬季休業開始

2018年		【学部】	【研究科】
1月	4日 5日 11日 12日 13・14 18日 19日 28日 29日 30～2月2日 30～2月3日	冬季休業終了 後期授業再開 シラバスチェック FDワークショップ センター試験 後期授業終了 後期試験開始 後期試験終了 卒業論文発表会 謝恩会 スケート実習 スキー実習（前段）	冬季休業終了 後期授業再開
2月	2日～ 3日～ 7日～ 8日 14～18日 21日	一般入試・系統別 一般入試・前期日程 一般入試・GS実技 スキー実習（後段）	修士論文発表会・公聴会 春季大学院入試
3月	3日 7日 15日 19日 22日 23日 29日	一般入試・スポーツ科学部特別募集 一般入試・後期日程 卒業式 授業アンケート報告 在学生履修登録開始 在学生履修登録終了	学位記授与式（博士） 卒業式・学位記授与式（修士） 在学生履修登録開始 在学生履修登録終了

3 教員組織 (2017年度)

スポーツ科学部長 田 中 守

教 授	青 柳 領 (幼児発育発達・スポーツ計量論)
	乾 真 寛 (コーチ学・サッカー)
	岩 本 英 明 (スポーツ整形外科・スポーツ医学)
	上 原 吉 就 (スポーツ内科学・スポーツ医学・予防医学)
	柿 山 哲 治 (スポーツ教育学・保健体育科教育学)
	柿 本 真 弓 (コーチ学・ダンス・体操・新体操競技)
	片 峯 隆 (コーチ学・運動学・バイオメカニクス・陸上競技)
	川 中 健太郎 (スポーツ栄養学・生化学・分子運動栄養学)
	小牟礼 育 夫 (スポーツ方法学・バスケットボール)
	下 園 博 信 (スポーツ心理学・スポーツ方法学・ラグビー)
	田 口 晴 康 (スポーツ運動学・体操競技・器械運動)
	田 中 宏 暁 (運動生理学・体力学・健康科学)
	田 中 守 (体力学・トレーニング学・生理学・ハンドボール)
	築 山 泰 典 (野外教育学・レクリエーション)
	中 原 一 (スポーツ方法学・柔道)
	布 目 寛 幸 (バイオメカニクス)
	檜 垣 靖 樹 (スポーツ生理学・健康運動学・予防医学)
	藤 井 雅 人 (スポーツ社会学・スポーツ教育学)
	村 上 純 (スポーツ方法学・コーチ学・ラグビー)
	森 口 哲 史 (公衆衛生学・鍼灸医学・ハンドボール)
	山 口 幸 生 (運動心理学・行動科学・テニス)
	米 沢 利 広 (スポーツ方法学・バレーボール)
特任 教授	梅 田 保 人 (保健体育科教育学)
准 教 授	今 村 律 子 (保健体育科教育学・コミュニケーション論)
	坂 本 道 人 (コーチ学・柔道)
	重 森 裕 (脳神経外科学・救急医学・スポーツ健康科学)
	田 場 昭一郎 (コーチ学・競泳)
	野 口 安 忠 (コーチ学・スポーツ方法学・陸上競技)
講 師	長 島 和 幸 (体育哲学・スポーツ史・レスリング)
	信 岡 沙希重 (コーチ学・陸上競技)
	渡 邊 正 和 (バイオメカニクス・コーチ学・硬式野球)

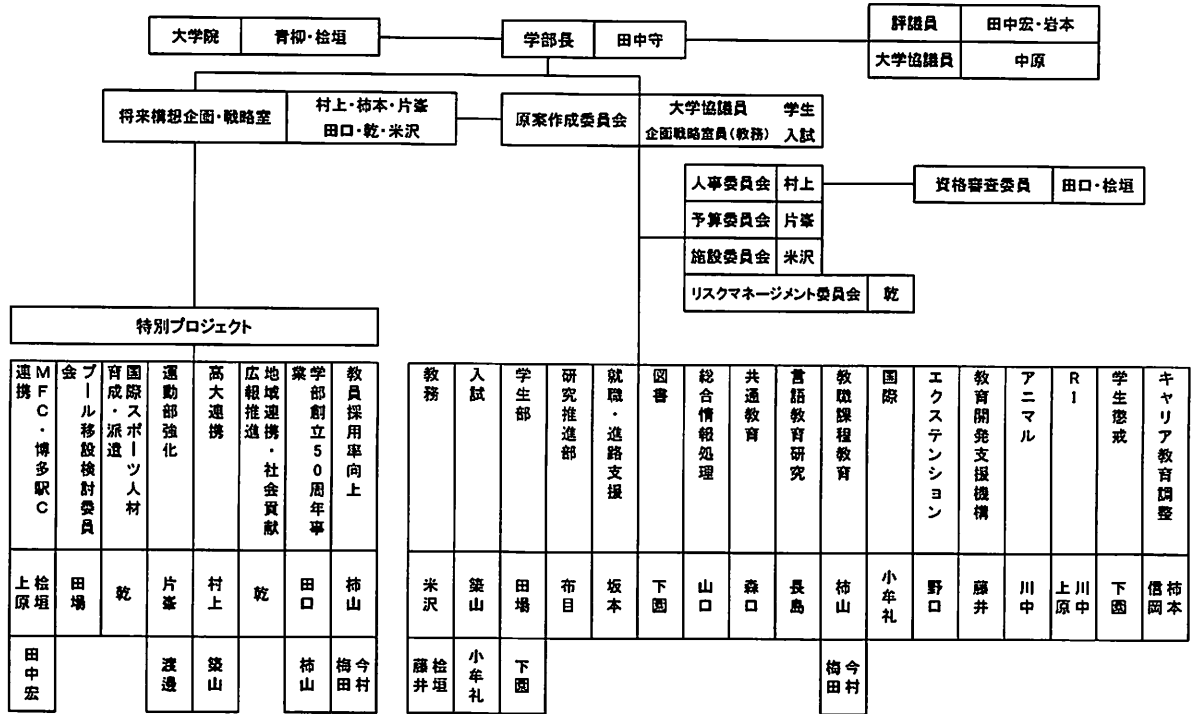
助	教	伊泉	賀原	崇嘉	人郎	助	手	大川	山畑	芽和	衣也
		伊藤	藤瀬	嘉寿	浩佑			高富	山岡	侑早	花紀
		塩田	方村	圭慎	哉志			花広	田瀬	健一	彬一
		田中	原中	麻衣	子太			福森	嶋本	百合	香美
		野秀	中崎	雄泰	二郎毅			山崎	本崎	郁祐	一郎
		水村	手井	佑一	斗和			山	口	祐一	
		森羅	方	成	圭惇						
		安渡	方邊	孝士郎							

大学院スポーツ健康科学研究科 担当教員 (2017年度)

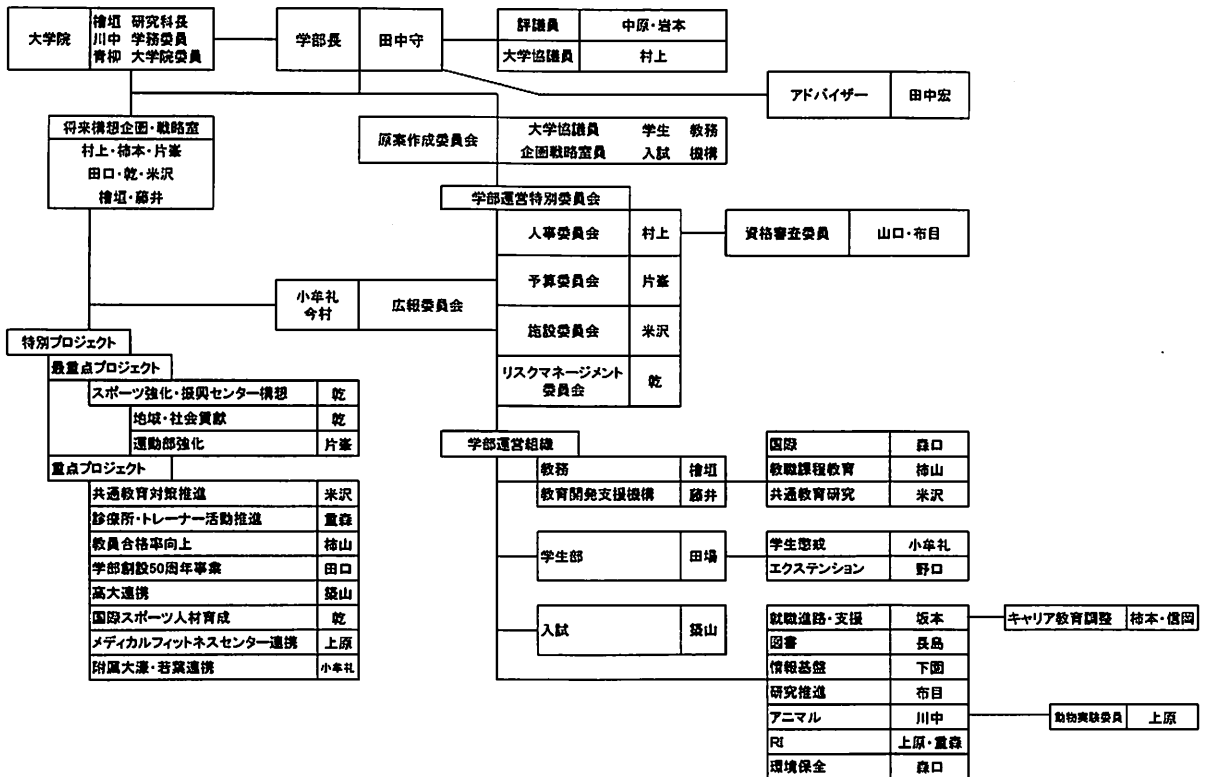
スポーツ健康科学研究科長 青柳 領 / 檜垣 靖樹
 (~2017.11) (2017.12~)

教	授	青岩	柳本	英明	領就	教	授	布目	寛幸
		上原	山哲	吉治	就治			檜垣	靖雅
		柿川	山中	哲健	太郎康			藤森	雅哲
		田川	口中	健太	康暁	准	授	山今	幸律
		田田	口中	晴宏	暁守	教	授	重森	圭成
		田田	中山	宏泰	守典	助	教	塩瀬	圭成
		築		泰典				羅	

スポーツ科学部教員組織図(～2017.11)



スポーツ科学部教員組織図(2017.12～)



4 入試状況、学生数及び卒業生数、出張講義

(1) スポーツ科学部

築山 泰典

■ 推薦入試

A方式推薦入試においては、スポーツ科学科は、募集人員54名に対し、受験者123名で合格者54名（競争率2.3倍）であった。また、健康運動科学科は、募集人員16名に対し、受験者19名で合格者16名であった。しかし、健康運動科学科では第二志望合格9名を含むため競争率は2.7倍を示す。両学科の競争率は2.3倍と2.7倍のバランスを保っているように見られるが、募集人員の少ない健康運動科学科において第二志望合格を継続実施している。

次に、スポーツ特別推薦においては、スポーツ科学科志願者49名に対し合格者46名（競争率1.1倍）であり、健康運動科学科では志願者4名に対し合格者3名（競争率1.1倍）を示し、学部としては49名の合格者とする結果であった。全学として82名の出願に対し77名の合格者であり、合格者に占める本学部への入学者は63.6%であった。

表1. 推薦入試状況

学科	A方式推薦入試					スポーツ特別推薦入試			
	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	募集人員	志願者	合格者	競争率
スポーツ科	54	124	123	54	2.3	50程度	49	46	1.1
健康運動科	16	19	19	* 16	2.7		4	3	1.3

競争率=受験者÷合格者（第二志望合格者を除く）、（スポーツ特別推薦入試は志願者÷合格者）*欄は第二志望合格者(9人)を含む

(福岡大学入試ガイド2019 P140より一部抜粋)

■ AO入試

特別講座及び公開練習会への参加者は、299名と昨年度の302名に対し3名の減少であった。スポーツ科学科に関しては、募集人員33名に対し、志願者143名で合格者33名（競争率は4.3倍）であった。また、健康運動科学科に関しては、募集人員7名に対し、志願者18名で合格者7名であった。健康運動科学科では第二志望合格3名を含むため競争率は4.5倍を示した。

表2. AO入試状況

学科	募集人員	公開練習会等の参加者	志願者	合格者	競争率
スポーツ科	33	299	143	33	4.3
健康運動科	7		18	* 7	4.5
合計			161	40	4.4

競争率=受験者÷合格者（第二志望合格者を除く）*欄は第二志望合格者(3人)を含む

(福岡大学入試ガイド2019 P142より一部抜粋)

■ 一般入試

2017年度よりスポーツ科学科のみ15名の定員増加が実施された（系統別日程2名、一般入試8名、センターⅠ期3名、センターⅡ期2名の増加）。

系統別日程では、スポーツ科学科募集人員7名に対し、受験者107名で合格者16名（競争率は6.7倍）であった。また、健康運動科学科は、募集人員2名に対し、受験73名で合格者14名（競争率は5.2倍）であった。

前期日程では、スポーツ科学科募集人員68名に対し、実技型においては受験者339名で合格者75名（競争率は4.5倍）、小論文型においては受験者85名で合格者22名（競争率は3.9倍）であった。また、健康運動科学科は、募集人員20名に対し、受験者163名で合格者42名（競争率は3.9倍）であった。

後期日程では、スポーツ科学科募集人員7名に対し、受験者34名で合格者9名（競争率は3.8倍）であった。また、健康運動科学科は、募集人員3名に対し、受験者13名で合格者6名（競争率は2.2倍）であった。

センター試験利用Ⅰ期では、スポーツ科学科募集人員8名に対し、受験者114名で合格者29名（競争率は3.9倍）であった。また、健康運動科学科は、募集人員3名に対し、受験者50名で合格者16名（競争率は3.1倍）であった。

センター試験利用Ⅱ期では、スポーツ科学科募集人員6名に対し、受験者78名で合格者9名（競争率は8.7倍）であった。また、健康運動科学科は、募集人員3名に対し、受験41名で合格者8名（競争率は5.1倍）であった。

一般入試（系統別日程）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	追加合格者	合格最高点	合格最低点
スポーツ科	7	107	107	16	6.7		308	259
健康運動科	2	73	73	14	5.2		293	254

一般入試（前期日程）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	追加合格者	合格最高点	合格最低点
スポーツ科	68	実技型						
		351	339	75	4.5	0	256	192
		小論文型						
		86	85	22	3.9	0	243	179
健康運動科	20	165	163	42	3.9	0	249	194

一般入試（後期日程）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	7	36	34	9	3.8
健康運動科	3	13	13	6	2.2

大学入試センター試験利用入試（Ⅰ期）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	8	117	114	29	3.9
健康運動科	3	52	50	16	3.1

大学入試センター試験利用入試（Ⅱ期）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	6	78	78	9	8.7
健康運動科	3	41	41	8	5.1

競争率＝受験者÷合格者

一般入試（系統別日程）は400点満点。

（福岡大学入試ガイド2019 P132-133より一部抜粋）

■ 学生数及び卒業生数

平成29年（5月1日現在）のスポーツ科学部学生数は、スポーツ科学科954名（1年次227名、2年次232名、3年次243名、4年次252名）、健康運動科学科313名（1年次77名、2年次75名、3年次78名、4年次以上83名）の合計1,267名である。

学生数（平成29年5月1日現在）

		1年次	2年次	3年次	4年次以上
スポーツ科学科	954	227	232	243	252
健康運動科	313	77	75	78	83
合計	1,267	304	307	321	335

■ 出張講義

2017年度入学センターより依頼があり実施した出張講義・模擬講義数は18件（生徒総数1,188名）であった。2016年度の14件（生徒数681名）より増加させることができた。福岡県下での実施が10件と最も多いが、大分県、鹿児島県、熊本県や山口県、愛媛県からも依頼があり、それぞれ教員の協力により実施することができた。2016年度より出張講義ガイドブック「福岡大学模擬講義NAVI」も発行され、本学部教員17名も掲載されている。また、引き続きマリンメッセ福岡で開催された「夢ナビライブ2017」に参画し、261名の生徒と直接かかわる機会を得た。

■ 平成 30 年度入試

アスリート推薦入試

	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	1	1	1

一般入試

	秋季*			春季*		
	志願者	受験者	合格者	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	2	2	1	5(2)	5(2)	4(2)
博士課程後期	0	0	0	1(1)	1(1)	1(1)

* () 内 社会人

外国人留学生入試

	志願者	受験者	合格者
博士課程後期	1	1	1

推薦入試**

	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	4(3)	4(3)	4(3)

** () 内 早期履修者数

■ 平成 29 年度の学生数及び修了生数

学生数 (平成 29 年 5 月 1 日現在)

		1 年次	2 年次 (留年者含む)	3 年次 (留年者含む)
博士課程前期	24	11	13	
博士課程後期	15	3	4	8
合計	39	14	17	8

平成 29 年度の修了生については、博士課程前期修了 12 名が学位（修士号）を取得。博士課程後期修了 4 名が学位（博士号）を取得し、満期退学が 2 名であった。

5 学部教育活動

(1) 入学前教育

築山 泰典

平成 30 年度 AO 入試及び推薦入試合格者に対して、外部業者と連携し、基礎国語 3 講、スポーツ科学入門 7 講の計 10 講からなる通信教育形式による入学前教育を実施している。今年度は、課題提出率が 95.3%であった。

基礎国語

- 1 講：PC 時代に相応しい言葉力をつける・ノートを作る
- 2 講：ことばを自分のものにする（短文作り）
- 3 講：目の前のものを正確に描写する

スポーツ科学入門基礎

- 1 講：「スポーツ科学」の研究領域
- 2 講：身体の構造と機能
- 3 講：フィットネス・トレーニング
- 4 講：スポーツのスキル
- 5 講：アスリートの身体管理
- 6 講：運動の効果とスポーツ損傷
- 7 講：データの処理

(2) 新入生懇談会

田場 昭一郎

新入生懇談会は、以下の内容を新入生に理解させ、活力ある学生生活となるための動機づけを行うものとし実施している。

- 1) 福岡大学の建学の精神を理解し、充実した学生生活を送るための諸注意。
- 2) スポーツ科学部生としての自覚を促し、スポーツ活動に専心する心構えと勉学に励む態度を啓発する。
- 3) 各種委員からのガイダンスにより、学生生活を円滑に始められるようにする。

<日 時> 平成 29 年 4 月 5 日（火曜日） 9 時集合（開会 9 時 15 分）

<場 所> A 棟 201 教室および第二記念会堂体育館

<内 容> スポーツ科学部長挨拶

健信会会長挨拶

総務委員からの案内

学生部ガイダンス（大学生活に関わる諸問題とその対応について）

福大生ステップアッププログラム「先輩と語る」

海外研修報告

①体育・スポーツのエキスパート教育プログラム

②JICA ボランティア派遣事業プログラム

日本語力テスト

各種委員会からの連絡と諸注意

①就職進路支援センター委員

②国際交流センター委員

③図書委員

④健康管理センター

⑤HD センター

⑥福岡リーガルクリニック法律事務所

早良警察署による連絡と諸注意（防犯・交通マナー講習）

福岡大学校歌の斉唱

スポーツ科学部教職員スタッフ紹介

各担当教員によるクラス担任別懇談会（グループディスカッション）

部活動アンケート調査

例年、スポーツ科学部の学部行事として新入生懇談会を実施している。本会では、学部生が授業で使用する学部指定ジャージを着用して参加することを義務付け、さらに挨拶励行、行動敏速、時間厳守を徹底し、この会を通じて、体育・スポーツに関わる者として、体を動かすことの社会的役割や生涯的価値を学ぶ先駆けとなるよう心掛けている。

スポーツ科学部長より、入学後にスポーツ科学部生として自覚を持つ事、学部のカリキュラムポリシーを十分に理解して自己研鑽に励む事、文武合一して多くのことを学んでもらいたいとの挨拶が行われた。健信会（福岡大学スポーツ科学部同窓会）水原博而会長より、有信会（福岡大学同窓会）との関わりや、卒業生との帰属意識を高めることの意義について説明が行われた。これらの講話は、社会人となるまでの最終教育機関の位置付けにある大学教育の導入教育として心に響く内容であった。また学生部ガイダンスでは、学生生活を送るにあたっての諸注意、困った時の学内における対応窓口について、さらに実際の学生生活で起こりうる諸問題なども事例を挙げて説明された。

また、スポーツ科学部の年間行事で新入生懇談会とスポーツ科学部祭を実施しているが、これらの行事において「福大生ステップアッププログラム先輩と語る—大学と社会—」を企画し、本学部を卒業した先輩方へ講話を依頼している。平成 29 年度は、リオデジャネイロオリンピック日本代表で 7 人制ラグビーのキャプテンを務めた桑水流裕策先輩にご講話を頂いた。学生時代に教員を目指しながら他の運動部の練習に参加してトレーニングを行うことで刺激を受けた経験談、そしてオリンピックの経験から「準備することの重要性」についての講話であった。リオ五輪 7 人制ラグビーでは、大会に向けて誰にも負けない練習を行い、自分たちが一番トレーニング

をしたという自負により緊張することなく試合に臨めたというお話は、競技スポーツに携わる学生にとって非常に興味深く、新入生も熱心に話を聞いていた。

さらに海外研修報告では、「ピークパフォーマンス演習 II」の授業と並行し「体育・スポーツのエキスパート教育プログラム」を利用して海外研修に行った学生のプレゼンテーションが行われ、特に競技においてトップアスリートを目指す新入生にとって貴重な発表内容であった。また「JICA ボランティア派遣事業プログラム」を利用して海外研修に参加した野球部とサッカー部の学生の発表も行われ、このプレゼンテーションも JICA と提携したスポーツの普及活動として、「スポーツを支える」という観点から行われている企画で、慣れない土地での先輩方の活躍に、新入生も興味を示す様子が伺えた。

この日実施される日本語力テストの結果は、1年次生の必修科目であるフレッシュマンセミナーの文章力講座と関連付けており、各教員が行うクラス面談で学生にフィードバックされ、入学後の文章力向上のための指導に役立っている。

最後に、スポーツ科学部の各種委員（就職進路支援センター・国際センター・図書）と、学内の各種センター（健康管理センター・HDセンター・法律相談）など、学内での施設や受付窓口に関する事細かな説明が行われた。そして、スポーツ科学部教員紹介、各教員別のクラスに分かれてのグループディスカッションとアンケート調査を実施した。

(3) クラス面談・修学指導

田場 昭一郎・米沢 利広

■ クラス面談について

スポーツ科学部では、1・2年次生を対象にクラス別個人面談（グループディスカッション）を実施している。クラス別個人面談は、講師以上の専任教員が10～12名程度のクラスを担当し、定期的に学生の実態調査を行うもので、学生の生活状況や生活態度を把握するとともに、学生に対するアドバイスや注意喚起を行っている。大学生生活を通じての授業等、また所属する運動部やサークル等の課外活動、アルバイト等の活動における問題点や悩みなどに対応し、個々にアドバイスできるような指導体制である。なお、面談については以下の通りである。

- 1) 新入生懇談会でグループディスカッション（4月5日）
- 2) 各担当教員における1年次生を対象とした個人面談（前後期に各1回）
前期：7月12日・後期：9月27日
- 3) 各担当教員における2年次生を対象とした個人面談（前後期に各1回）
前期：5月15日～26日・後期：9月26日～10月7日

1年次生は、学士課程の教育充実を図るために、基礎教育と導入教育を目的とした「フレッシュマンセミナー」が開講されており、その授業の1コマとして前後期に各1回ずつクラス面談を実施している。

2年次生は、継続的な指導として、1年次に担当した教員により引き続き個別指導が実施され、前・後期にクラス面談が行われる。

3年次生以降は、必修科目である卒業論文の事前指導として開講されている「スポーツ科学演習」を履修するため、各担当教員のゼミナールに所属し、その後、卒業までゼミナールの担当教員によって個別指導が行われる。

スポーツ科学部では、このような取り組みによって徹底した学生の指導体制を構築しており、学生も様々な立場にある教職員のアドバイスを受け、4年間の充実した学生生活が期待され、その成果は非常に大きい。

■ 修学指導について

スポーツ科学部は、前述した通り全学生を対象としたクラス別個人面談と修学指導対象の学生に対して面談を実施している。クラス面談に加えてさらに指導が必要な学生には、教務委員、学生部委員、入試委員、教務関係担当者によって、修学指導を実施している。対象となる学生は以下の通りである。

- 1) 2年次生：前年度の取得単位数が 23 単位以下の学生（登録単位数の半分以上の学生が対象）
- 2) 3年次生：前年度までの取得単位数が 46 単位以下の学生
- 3) 4年次生以降：1～3年次までの取得単位数が 77 単位以下の学生（卒業見込みなし）

面談の内容については、例年通り修学指導記録書に「なぜ単位を取れなかったのか?」、「今後の対応はどうするのか?」といった点を中心に記録して学生の指導を行った。単位が取れなかった学生の理由としては、「授業の欠席が多いこと」、「試験勉強が十分にできなかったこと」、「試験そのものができなかったこと」が挙げられた。1年次生の時には安易に単位が取れると油断して単位が取れなかった学生や、試験勉強の方法がわからない学生もいた。このような点を踏まえて、試験勉強に対するアドバイス、授業への出席の指導、今後の進路に対するアドバイスを行った。

学部・年次別の単位修得不振者の状況%（前年）

（平成 30 年 4 月 1 日現

在）

	平成 29 年度入学生 (17 台)	平成 28 年度入学生 (16 台)	平成 27 年度入学生 (15 台)
修得単位	30 単位以下	60 単位以下	90 単位以下
学部・学科			
スポーツ科学部	10.2(11.0)	11.0(10.0)	9.7(12.2)

（平成 30 年度父母懇談会のしおり p10-11 より一部抜粋）

本セミナーは、学生自身が「如何に学び、社会に貢献するか」について自問自答ながら自学自習を実践し、スポーツ科学部生としての規範とスポーツ科学部で学ぶ専門領域を理解し、卒後の進路と目標を明確に示すことができるようになることを目的としている。

授業内容は、1) 田中守学部長による「スポーツ科学部生として、理論と実践が融合した文武合一のすすめ」、2) 体育学部一期生の水原博而氏による「体育学部の歴史からその伝統と誇り」、3) コンピテンシー診断テスト、4) 外部講師による文章力講座、5) 日本語能力基礎調査、6) 本学知的財産センターの角谷浩准教授による「スポーツと知財」、7) 教育開発支援機構の須長一幸准教授による「言葉の力」、8) スポーツ科学部全教員による専門性を生かした講義、9) スポーツ科学部全教員による1年次学生に対する個別の就学指導、などで構成されている。以下に、特筆すべき取り組みについて記載する。

コンピテンシー診断テストは、本学就職支援センターの協力を得て、テストの実施とその結果の解説を実施している。コンピテンシーとは、高い成果を生み出す人の特徴的な行動特性のことをいい、学生生活で身につけたい6つの力、要望に応える力、新しい価値を創る力、何かを変える力、きちんとやる力、自らを活かす力、互いを活かす力を評価し、解説を加えることで、学生への気づきを促している。

文章力講座は、平成22年度から中学・高校で国語教員を務めた退職教員に講師依頼し、作文を主な課題とした内容を実施している。大学生の言葉の簡素化が、多くの専門家に指摘されており、特に本スポーツ科学部生の日本語力は、他学部より低いことが判明している。そこで文章力講座では、単に語彙を向上させることだけでなく、1) 読み手意識を持った文章が書ける、2) 自分をしっかり見つめた文章が書けるようになる、3) 大学生活に必要なレポート・論文作成の基本がわかり、書けるようになる、ことを狙いとしている。1クラス30名(前半・後半)で、5名の国語教師が担当し、課題作文の作成—作文指導と添削—課題作文の再提出といった流れで授業を進めている。受講した学生からの感想では、「文章力がついた」「書き方がわかった」「自分のためになった授業だった」「成長した気がする」など肯定的な評価が多数を占めている。特に受講生の50-60%が「読み手意識を持った文章が書けるようになった」と回答している。

日本語能力基礎調査は、本講座開始当初より使用していた語彙力の豊富さを判定する「日本語力判定テスト」を、平成29年度より「日本語能力基礎調査」に切り替えて実施している。本調査は語彙力に限定せず、日本語力の多様な側面を評価可能であり、学生個人への豊富なフィードバックが可能である。テストは1年生入学時(4月)、1年生フレッシュマンセミナー終了時(7月)の年2回実施となっている。測定結果は、年に2回行われるクラス面談(各専任教員が1学年11名程度を担当)時に配布し、1年生の基礎学力把握と学習指導の資料として有効に活用している。

言葉のカプログラムは、1) グループで学習するための基本的なノウハウを身につけ、実践する、2) 論理的な文章の構造を把握し、実際にそうした文章の骨格を作る、をねらいとして展開している。テーマは、①「部活動において厳しい上下関係は必要か」、②「中高生に対する体罰を用いた指導は意味があるのか」など、身近な課題を用いている。具体的な例を掲げてディスカ

セッションすることで議論の深まりが感じられ、関連する要因の可視化は論点の整理に有用と思われる。なお、2017年度は教育開発支援機構の須長一幸准教授と橋場論講師の指導を仰ぎながら、①を桧垣、②を柿山が担当した。また、②については、教育開発支援機構主催の新任教員研修会にも活用された。

(5) ステップアップセミナー授業法

坂本 道人

■ 本講座の背景

1) 本講座の背景

2017年度の全国大卒求人倍率は、1.78倍（前年度1.74倍 リクルートワークス研究所調べ）となっており、企業の採用意欲の高い状況が続いている。本学に寄せられた求人についても6,262件（前年度比475件減、8.0ポイント減）、来学企業件数は1,572社（同1社増）であった。このような状況のなか本学部の就職率は、男子98.7%、女子100%、全体99.2%であった。就職率だけをみると、就職状況は良好であるといえるが、今後、本学部が就職支援において目指すべきものは、学生個々の就職満足度の充実にあることにあるといえよう。

2) 本講座のねらい

2017年度の就職活動開始時期については、前年度同様、企業の広報活動日が3月1日以降、選考活動開始日が6月1日以降であり、短期決戦型と言われる状況が続いている。このような状況を受けて本講座は、学生がよりスムーズに充実した就職活動を展開できるよう、活動を開始する直前の2年次後期に開講されている。内容についても、本学部生に関係の深い職種や学生の要望に沿った講師の方々をお招きし、自身の体験談、社会の実情、現時点で身につけておくべきスキルなど様々な内容が盛り込まれている。また、今や就職試験や採用試験では一般的であるSPIの小テストを毎時間実施するなど、継続的に一般教養力を高めることも併せて取り組んでいる。このように、学生一人一人の就職活動に対する興味を促し、この時期に何を考え、何を準備しておくべきかを考えさせることが本講座のねらいである。

3) 今年度の新たな取り組み

今年度においても、授業アンケートによる学生の意見や、前述した社会情勢などを考慮し、講義スケジュールの作成に取り組んだ。近年の公務員志望者増加に伴う措置として、昨年度に引き続き現役消防官、現役中学校教員による講義を取り入れた。続いて、青年海外協力隊経験者や昨年度本学と独立行政法人国際協力機構（JICA）の間で締結されたボランティア事業経験者による講義も取り入れるなど、グローバル人材育成も視野に入れた内容も加えた。さらには、近年、文部科学省において大学教育を通じたジェネリックスキル育成への期待が高まっていることを受け、コンピテンシーテストとその後のフォローアップセミナーも併せて実施した。昨年度と比べ新たに工夫した点は、スポーツ関連の有無に関わらず、一般企業で活躍する学部のOB・OGを講師として御招きし、現役学生に比較的近い存在からのアプローチを取り入れ、就職に対する動機付けを試みた。

4) 成果と課題について

これまでの本講座に対する学生の評価については、「将来、消防官を目指す私にとってとても興味深い内容だった」、「教員は、教えるということを通して生徒と向き合い、一つ一つの行動で生徒と共に成長していくものなんだと感じた」、「コンピテンシーの結果から自分の強み、弱みを客観的に知ることができた」、「青年海外協力隊について興味を持った。勇気を出して一步を踏み出したいと思う。」など、興味・関心の高さが認められた。しかし、「留学や海外での活動についてもっと情報が欲しい」、「他の公務員の話を知りたい」、「スポーツ関連企業の実情や取り組みを知りたい」など、新たな学生からの要望も示された。学生を取り巻く就職状況は前述のとおり毎年大きく変化している。本講座においても、それらの変化に対する迅速な対応が求められている。今後の本講座の課題については、就職進路支援センターが推奨するインターンシップ（就業体験プログラム）関係講座の積極的な導入や、本学の教育理念にもあるグローバル人材育成に即した、海外留学という選択肢の話題にも力を入れることが挙げられる。これらの点を来年度以降に向けた課題として、本講座の更なる充実を図っていきたいと考える。

6 FD・SD活動

(1) シラバス点検

藤井 雅人

スポーツ科学部では、毎年1月中旬に教務委員が中心となって、非常勤講師を含むスポーツ科学部専門科目担当教員から提出された次年度用の全シラバスの確認作業を行っており、平成29年度で8年目を迎えることとなった。

平成30年度シラバスの確認作業は、平成30年1月11日に、スポーツ科学科の確認作業担当者（下園博信、田口晴康、米沢利広、今村律子、長島和幸）、健康運動科学科の確認作業担当者（藤井雅人、森口哲史、山口幸生）および確認作業担当者作成分確認者である教務委員の檜垣靖樹が行った。その際、シラバスチェック委員会が作成した「シラバスチェックのポイント」を参考に、特に「授業の到達目標」および「成績評価基準および方法」についての記載内容を、次のような観点に基づき確認した。すなわち、「授業の到達目標」については、「学生が主体で書かれているか」「具体的に箇条書きされているか」「客観的に測定できる目標を設定しているか」、また「成績評価基準および方法」については、「評価基準、評価方法、割合に分けて書かれているか」「到達目標に対する評価基準が記載されているか」「評価基準は測定可能なものになっているか」等の観点である。また、「授業時間外の学習（予習・復習）について記載されているか」「授業中の態度、遅刻等の取り扱いといった注意点は、履修上の留意点で言及されているか」「15回の授業計画が適切に記されているか」といった点についても確認がなされた。その際に適切でない判断された内容については、科目担当者に修正の上、再提出するよう求めた。その後再提出されたシラバスの修正箇所については、1月17日までに、確認作業担当者によって全ての確認が完了した。こうした確認・修正の取り組みもあって、平成30年度シラバスは全体的に見て、「シラバス作成のためのガイドライン」に則って適切に記載された内容に統一されることとなった。

(2) 学外研修参加

藤井 雅人

平成29年度は、スケートおよびスキー実習担当者の中から計5名が、以下の学外実技研修に参加した。

- ・平成29年12月9・10日に長野県帝産アイススケートトレーニングセンターで開催された、大学スケート研究会主催の第59回大学体育指導者スケート研究集会に、田方慎哉が参加した。
- ・平成29年12月26～28日に岐阜県平湯温泉スキー場およびほうのき平スキー場で開催された、公益社団法人全国大学体育連合東海支部主催の平成29年度冬期スノースポーツ研修会に、スキー研修を目的に野中雄太、川畑和也の2名が参加した。
- ・平成30年1月3～6日に長野県菅平高原スキー場で開催された、大学スキー研究会主催の平成29年度大学体育スキー指導者研究集会に、田中宏暁、信岡沙季重の2名が参加した。（ただし、田中については1月5日までの参加。）

上記の学外実技研修参加者によって作成された詳細な報告書は教授会において報告され、研修内容の情報共有が図られた。また、スケートおよびスキー実習中に研修参加者から他教員への研修内容の伝達にも取り組まれた。

さらに、藤井雅人、川畑和也の2名が、平成30年3月1日に目白大学新宿キャンパスで開催された、公益財団法人全国大学体育連合主催の第6回大学体育研究フォーラムに参加した。2名の参加者からそれぞれ本フォーラムに関する報告書が教授会で報告され、教養体育授業を中心とする大学体育の振興に関して、特にアクティブ・ラーニング型の授業形態の導入、ICTの活用など、最新の情報が紹介された。

(3) ワークショップ、研修会の開催

藤井 雅人

平成30年1月12日にスポーツ科学部第二記念会堂1222教室において、山本啓一氏（北陸大学教授）を講師とする「コンピテンシーテストの結果を用いた具体的な教育実践」と題した平成29年度スポーツ科学部主催FDワークショップを開催した（資料1）。参加者は、講師以上の専任教員および助教・助手を合わせて、計48名、およびスポーツ科学部事務職員2名、助成課事務職員1名であった。

平成27および28年度に引き続き、平成29年度のFDワークショップも「学生のコンピテンシー」をキーワードとして開催された。ただし、前年度のワークショップの主題がコンピテンシーそのものの大学教育への活用にやや重きを置くものになったことを受けて、本年度のFDワークショップでは、山本教授の講演内容を踏まえて、学部教員全体で考え、ディスカッションすることを通して、コンピテンシーテストおよびその結果の解説・フィードバックを活かした、新たな教育方法を開発するための示唆を得ることを目指した。

そして実際に、今回のFDワークショップでは、北陸大学の実践例を通して、コンピテンシーテストの結果に基づき学生自身がゼミの中で行う目標設定やふりかえり、その際の教員の役割といった観点で、具体的な教育方法に関する有益な情報・示唆を得ることができた。また、同テストを経年的に実施・分析することで、学生に対する個別の教育・指導の可能性が広がるという点などは、今後の本学部における同テストの結果活用にとっても重要な論点であることが共通認識された。

なお、上記のFDワークショップに先立って、平成29年9月5日にスポーツ科学部第二記念会堂1222教室において、国立済州大学校教育大学のChoi Taehee（チェ テヒ）教授を講師とする、大学院スポーツ健康科学研究科主催FD研修会「第1回 教員の質の向上を目指す研修会 - 韓国における大学教員の評価制度と教員養成の実例」を開催した。FD研修会参加者は、韓国の大学教員の評価制度、およびChoi教授の本務校の事例を交えた学校教員養成制度に関する知見を新たに得たことで、日本および福岡大学でのそのあり方について比較論的に省察することができた。

（４）授業アンケート（実施、各教員への結果の通知、アンケート結果の公開、各教員による報告書の提出、報告書のまとめ）

藤井 雅人

平成 29 年度は前期 7 月 10～24 日まで、および後期 12 月 11～26 日まで、各科目担当者によって受講生を対象とする授業アンケートが実施された。授業アンケート実施後は、業者による集計作業がなされ、次学期はじめに各教員に各科目についての集計結果が通知された。したがって、平成 29 年度には、平成 28 年度後期および平成 29 年度前期に実施した授業アンケートの集計結果が取り扱われたことになる。

また、各科目を共通教育科目である「生涯スポーツ演習」「生涯スポーツ論」、および専門教育科目である「専門実技科目」「専門講義科目（必修）」「専門講義科目（選択）」「実験・実習・演習科目」「スポーツ科学演習・卒業研究論文」（ただし後期のみ）に分類し、それぞれの科目領域の平均点を学部施設内掲示板および学部ホームページ上で公開した（資料 2-1、2-2）。さらに、教員が学部事務室において全ての科目の集計結果を閲覧できるようにした。

スポーツ科学部では各教員に、授業アンケートの結果に基づき講義および実技それぞれ 1 科目について「シラバスに示した到達目標に対する自身の評価と学生の達成状況について」「今回の改善点とそれによる学生の反応について」「次回の改善点について」という 3 つの項目に関して記述した「授業改善報告書」の提出を義務づけている。平成 29 年度には、在職する講師以上の専任教員および助教・助手の全員から平成 28 年度後期（44 名分：100%）および平成 29 年度前期（55 名分：100%）の授業改善報告書が提出された。また、それぞれ 7 名および 13 名の非常勤講師からも授業改善報告書が提出された。全ての授業改善報告書は、氏名のみが伏される形で、学部事務室内において教員を対象に公開された。この授業改善報告書については、平成 22 年度の導入から平成 29 年度前期分まで計 13 回提出されており、毎回前年度あるいは前回の反省を踏まえた改善報告が克明に記されるなど、全教員の積極的かつ継続的な改善努力が看取される。

各教員の授業改善報告書は、学部 FD・SD 委員会によって「専門講義科目」「専門実技科目」「生涯スポーツ論」「生涯スポーツ演習」に分類した形で「授業改善報告書まとめ」として集約・総括される。また、それとは別に、同委員会によって授業改善報告書の上記 3 つの質問項目に関する各教員の具体的な記述内容（コメント）を記した「『授業改善報告書』コメント集」が作成され、各教員の授業改善の試みの網羅的な紹介とその情報共有が図られている。なお、平成 28 年度後期の授業改善報告書まとめ、および「授業報告書まとめ」コメント集が、平成 29 年 10 月 18 日開催の教授会で報告されている。また、この両者は PDF 文書として、平成 29 年 10 月 31 日に、授業における教育の質向上に資することを目的に、助教・助手を含めたスポーツ科学部全教員に学部事務職員を通してメール配信されている。さらに、初の試みとして、平成 28 年度後期の授業改善報告書を提出した非常勤講師に対しても両文書を配布した。なお、平成 29 年度前期の授業改善報告書まとめ、および「授業報告書まとめ」コメント集については、現在作成中である。

平成 28 年度後期の授業改善報告書まとめでも総括しているとおり、「専門講義科目」「専門実技科目」「生涯スポーツ論」「生涯スポーツ演習」の全領域において、多くの教員がシラバス

に示した到達目標を概ね達成できたとしている。また、提出された授業改善報告書によれば、多くの講義科目で、ミニッツペーパーの活用、配布資料や映像をはじめとする教材の利用などを通して、学生に理解しやすい授業展開に心がけられている。さらに、グループワークの導入といった学生の能動的な学びを目指す試みも目についた。一方で、授業内容の一層の精選、話し方やスライドの映し方の改善、受講態度に問題のある学生への適切な対応などが課題として認識されている。実技授業に関する授業改善報告書の多くでも、理解しやすい動作説明、映像の活用、受講者間での熟練者による非熟練者への指導・助言など、授業づくりのための多様な工夫が確認される一方で、技能や意欲に関する個人差への対応の必要性とその難しさに頻繁に言及されていた。また、平成 29 年度より利用可能となる総合体育館とともに、新たに活用される教科書『大学生の健康生活とスポーツ』への期待についての記述も頻繁に見られた。

平成29年度スポーツ科学部主催FDワークショップ

コンピテンシーテストの 結果を用いた 具体的な教育実践

●ねらい:

昨年度は、PROGコンピテンシーテストの結果を活用することが、今後の大学教育にとっていかに有益であるのかを学んだ。今回は、そのテスト結果を具体的にどう教育実践につなげていくのかについて、事例を交えて探してみたい。



講師： 山本啓一
北陸大学
経済経営学部長

九州国際大学法学部にて2008年から2012年まで法学部長を務め、退学防止対策、初年次教育改革、ジェネリックスキル育成、カリキュラム改革を手がける。その後も、産業界GP九州ブロックでルーブリック等の学修評価に関する取り組みを行う。初年次教育学会理事。

現在は北陸大学において、経済経営学部長として教育改革に携わる。2つの新学部でそれぞれコンピテンシーとリテラシーを評価する新入試(21世紀型スキルAO入試)を考案。

プログラム(90分):

- 1) イントロダクション
- 2) PROGコンピテンシーテストとは
- 3) テスト結果を活用した教育実践事例
- 4) 質疑応答

【日時】 2018年1月12日(金) 16:30～18:00

【場所】 スポーツ科学部 第二記念会堂 1222教室

【対象】 福岡大学教職員

【問い合わせ先】 スポーツ科学部事務室(内線:2266、2267)

※参加のお申し込みの際はお名前とご所属をお伝えください

平成28年度後期スポーツ科学部授業アンケート集計結果について(お知らせ)

スポーツ科学部では平成28年度後期に授業アンケートを実施しました。本学部の教員が行う全授業科目を対象に各質問項目の評価を集計し、授業形態別に平均値を出しました。結果は以下のとおりです。

なお、評価は5段階で行い、「共通質問項目」の平均を表記しています。

結果 1.生涯スポーツ演習(スポーツ科学部以外)
 【対象科目数: 150 アンケート実施科目数: 143】
 履修登録数: 4,166名 アンケート実施対象者数: 4,022名 回答者数: 3,278名 回答率: 81.5%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.3
A-2 授業は理解しやすかった	4.4
A-3 教師の熱意を感じた	4.5
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.5
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.2
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.5
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.5
A-8 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.4
A-9 授業の目標に到達するに適切な内容であった	4.4
A-10 この授業に満足している	4.5

結果 5.専門講義科目(選択)
 【対象科目数: 28 アンケート実施科目数: 24】
 履修登録数: 3,009名 アンケート実施対象者数: 2,777名 回答者数: 1,746名 回答率: 62.9%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.0
A-2 授業は理解しやすかった	4.0
A-3 教師の熱意を感じた	4.2
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.1
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.0
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.0
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.1
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.2
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.1
A-10 この授業に満足している	4.1
A-11 授業の目標に到達するに適切な内容であった	4.1

結果 2.生涯スポーツ論(スポーツ科学部以外)
 【対象科目数: 12 アンケート実施科目数: 12】
 履修登録数: 1,442名 アンケート実施対象者数: 1,442名 回答者数: 848名 回答率: 58.8%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.7
A-2 授業は理解しやすかった	3.8
A-3 教師の熱意を感じた	3.8
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	3.9
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	3.9
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.8
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.0
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.2
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	3.8
A-10 この授業に満足している	3.7
A-11 授業の目標に到達するに適切な内容であった	3.8

結果 6.実験、実習、演習科目(心理学、生理学、運動学、社会調査、情報処理、健康スポーツ)
 【対象科目数: 25 アンケート実施科目数: 23】
 履修登録数: 917名 アンケート実施対象者数: 900名 回答者数: 721名 回答率: 80.1%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.2
A-2 授業は理解しやすかった	4.1
A-3 教師の熱意を感じた	4.3
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.3
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.1
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.2
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.4
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.3
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.3
A-10 この授業に満足している	4.3
A-11 授業の目標に到達するに適切な内容であった	4.4

結果 3.専門実技科目(レクリエーション演習、生涯スポーツ演習Ⅰ～Ⅳを含む)
 【対象科目数: 43 アンケート実施科目数: 41】
 履修登録数: 2,032名 アンケート実施対象者数: 1,829名 回答者数: 1,401名 回答率: 76.6%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.3
A-2 授業は理解しやすかった	4.3
A-3 教師の熱意を感じた	4.4
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.3
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.2
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.3
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.4
A-8 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.3
A-9 授業の目標に到達するに適切な内容であった	4.3
A-10 この授業に満足している	4.4

結果 7.スポーツ科学演習・卒業研究論文
 【対象科目数: 58 アンケート実施科目数: 47】
 履修登録数: 607名 アンケート実施対象者数: 486名 回答者数: 391名 回答率: 80.5%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.5
A-2 授業は理解しやすかった	4.5
A-3 教師の熱意を感じた	4.6
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.6
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.4
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.5
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.6
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.5
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.5
A-10 この授業に満足している	4.6
A-11 授業の目標に到達するに適切な内容であった	4.6

結果 4.専門講義科目(必修)
 【対象科目数: 9 アンケート実施科目数: 9】
 履修登録数: 2,000名 アンケート実施対象者数: 2,000名 回答者数: 1,485名 回答率: 74.3%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.7
A-2 授業は理解しやすかった	3.7
A-3 教師の熱意を感じた	3.9
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	3.9
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	3.9
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.8
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	3.9
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.0
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	3.9
A-10 この授業に満足している	3.8
A-11 授業の目標に到達するに適切な内容であった	3.8

< 参考 >
 評価(5段階)

全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらでもない	やや当てはまる	とても当てはまる
1	2	3	4	5

以上

平成29年度前期スポーツ科学部授業アンケート集計結果について(お知らせ)

スポーツ科学部では平成29年度前期に授業アンケートを実施しました。本学部の教員が行う全授業科目を対象に各質問項目の評価を集計し、授業形態別に平均値を出しました。結果は以下のとおりです。

なお、評価は5段階で行い、「共通質問項目」の平均を表記しています。

結果 1.生涯スポーツ演習(スポーツ科学部以外)
 【対象科目数: 148 アンケート実施科目数: 145】
 履修登録数: 4,198名 アンケート実施対象者数: 4,100名 回答者数: 3,515名
 回答率: 85.7%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.4
A-2 授業は理解しやすかった	4.5
A-3 教師の熱意を感じた	4.5
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.5
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.1
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.6
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.5
A-8 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.4
A-9 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.5
A-10 この授業に満足している	4.5

結果 4.専門講義科目(必修)
 【対象科目数: 9 アンケート実施科目数: 9】
 履修登録数: 1,482名 アンケート実施対象者数: 1,482名 回答者数: 997名
 回答率: 67.3%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.7
A-2 授業は理解しやすかった	3.7
A-3 教師の熱意を感じた	3.9
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	3.9
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	3.9
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.9
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	3.9
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.0
A-9 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.0
A-10 この授業に満足している	3.8
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	3.8

結果 2.生涯スポーツ論(スポーツ科学部以外)
 【対象科目数: 13 アンケート実施科目数: 10】
 履修登録数: 1,676名 アンケート実施対象者数: 1,361名 回答者数: 913名
 回答率: 67.1%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.7
A-2 授業は理解しやすかった	3.8
A-3 教師の熱意を感じた	3.9
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.0
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	3.9
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.9
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.0
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.1
A-9 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	3.9
A-10 この授業に満足している	3.8
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	3.9

結果 5.専門講義科目(選択)
 【対象科目数: 32 アンケート実施科目数: 24】
 履修登録数: 4,100名 アンケート実施対象者数: 3,647名 回答者数: 2,452名
 回答率: 67.2%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.0
A-2 授業は理解しやすかった	4.0
A-3 教師の熱意を感じた	4.1
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.1
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.1
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.1
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.1
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.2
A-9 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.1
A-10 この授業に満足している	4.0
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.1

結果 3.専門実技科目(レクリエーション演習、生涯スポーツ演習Ⅰ～Ⅳを含む)
 【対象科目数: 61 アンケート実施科目数: 61】
 履修登録数: 2,689名 アンケート実施対象者数: 2,689名 回答者数: 2,351名
 回答率: 87.4%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.2
A-2 授業は理解しやすかった	4.3
A-3 教師の熱意を感じた	4.4
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.4
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.1
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.3
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.4
A-8 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.3
A-9 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.3
A-10 この授業に満足している	4.3

結果 6.実験、実習、演習科目(心理学、生理学、運動学、社会調査、情報処理、健康スポーツ)
 【対象科目数: 11 アンケート実施科目数: 10】
 履修登録数: 1,015名 アンケート実施対象者数: 812名 回答者数: 704名
 回答率: 86.7%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.2
A-2 授業は理解しやすかった	4.2
A-3 教師の熱意を感じた	4.2
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.2
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.2
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.2
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.3
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.3
A-9 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.2
A-10 この授業に満足している	4.2
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.2

< 参 考 >
 評価(5段階)
 全く当てはまらない 1 あまり当てはまらない 2 どちらでもない 3 やや当てはまる 4 とても当てはまる 5

7 地域連携・社会貢献・広報推進

野口 安忠・乾 真寛・小牟礼 育夫

■ 地域連携

平成 28 年度、エクステンションセンター事業である福岡大学市民カレッジの参画で開講した講座数は 12 講座、受講者数が 584 人であったのに対し、平成 29 年度の講座数は 11 講座、受講者数は 496 人と講座数で 1 講座、全体の受講者数も 88 人と大幅に減少している。

しかし、閉講した講座のキッズラグビーに関わる担当教員ならびに部活動は、スポーツ庁の「2018 年ラグビーワールドカップ普及啓発事業」JRFU 放課後ラグビープログラムの参画で、ラグビーの普及・振興や地域貢献の場を移して近隣の中学生を対象に継続した指導をしている。このようなことから、エクステンションセンター事業だけの講座数と受講者数は減少しているが、学部全体で見ればスポーツを通じた地域・社会貢献活動は積極的に実施しているものと言える。

<市民カレッジ スポーツ講座>

◇キッズ・スポーツ教室 — 受講生 6 教室 計 286 名

- ・前期開催：キッズ体操教室（50 名）、キッズ・サッカークラブ（90 名）、キッズ・バレーボール教室（16 名）、キッズ・バスケットボール教室（17 名）
- ・後期開催：キッズ体操教室（30 名）、キッズ陸上教室（83 名）

◇一般・スポーツ教室 — 受講生 5 教室 計 210 名

- ・前期開催：女性のための元気体操教室（50 名）、ホノルルマラソンを完走しよう！A コース（62 名）、ホノルルマラソンを完走しよう！B コース（43 名）ホノルルマラソンを完走しよう！C コース（3 名）
- ・後期開催：女性のための元気体操教室（52 名）、JRFU 放課後ラグビープログラム（30 名）

<事業企画・協力>

平成 29 年度、福岡市との連携協定に基づく地域・社会貢献活動では、教育支援プロジェクトとして新体力テスト、サッカー、水泳を中心に小中学校で 13 件の授業支援とアイランドシティにおける健康まちづくりで周辺住民 58 名を対象にスロージョギングを実施した。

また、授業支援の新体力テストでは、「私立大学研究ブランディング事業（タイプ B）」における「学童期から思春期における学校適応・活力ある人間形成」の研究チームが連動し、小学生を対象に児童の体格（肥満）が体力に及ぼす影響をテーマに生活習慣なども含めて研究成果を報告している。なお、同チームでは、授業支援において小中学生を対象としたコーディネーショントレーニングの効果を検証するため、福岡市教育委員会と教材資料としての書籍ならびに DVD を作成し、平成 30 年度に福岡市の小中学校に無料配布する準備を整えた。さらに、今後は年代の幅を広げ、平成 23 年度から那珂川町との連携協定で進めてきた高齢者を対象とした運動指導および研究の経験を活かし、「中高年期から老年期における社会活動支援・活力ある高齢者」の研究チームで、高齢者に対する運動指導や研究を通じた地域・社会貢献をしていくことも決定している。

◇新体力テスト支援・授業支援等

- ・新体力測定支援：那珂小学校、春住小学校、東住吉小学校、塩原小学校、飯原小学校

- ・体育（水泳）…那珂小学校
- ・体育（サッカー）…那珂小学校、横手小学校
- ・小学校教諭向けスノーケリング講習会…横手・東住吉・金武小学校
- ・スノーケリング体験…東住吉小学校、横手小学校、金武小学校

■ 社会貢献

本学部で発足した「スポーツ振興プロジェクトチーム」において、教員やサッカー部が中心となり、障がい者スポーツを支援する「ふれあいスポーツフェスタ 2017 in 福岡大学」を掲げ、本学サッカー場で精神障がい者を対象とした「スカンビオンカップ」と視覚障がい者を対象とした「ブラインドサッカー西日本リーグ戦」のサッカー大会を開催した。開催にあたり、本学では全学部からボランティア募り、約 200 名の学生ボランティアスタッフが大会運営に協力し、イベントの様子は多くの地元メディアから取り上げられ、大学が地域や企業と共に進めるスポーツ振興事業として大きな成果を残した。そのほかに、総合体育館にて障がい者スポーツフェスタ 2017(車椅子バスケットボール大会)も開催された。

また、元サッカー日本代表選手の指導のもと親子サッカー教室、小学生向けサッカー教室、福岡少年院のサッカー指導、地域のサッカー指導者を対象に海外より招聘した監督による講演会および選手クリニック、福岡大学招待中学校女子バレーボール大会、平成外環通りウォーキング大会を開催し、地域コミュニティの活性化を図った。

■ 広報推進

本年度は、ふれあいスポーツフェスタ 2017 in 福岡大学の開催や株式会社ミズノとの連携・協力協定の締結など、スポーツをキーワードとしメディア露出が見られた。本学ホームページのアクセス状況を見たところ、スポーツ関連の主なウェブサイトは「最新設備を備えた多機能スポーツ施設「福岡大学総合体育館」完成（アクセスビュー数 1282）」「九州六大学野球伝統の一戦「福西戦」（アクセスビュー数 629）」「サッカー」リーグへの入団記者会見（永石選手・山下選手）（アクセスビュー数 586）」などが挙げられた。次年度に向けた学部ホームページのリニューアルに伴い、学部独自のアクセス解析の導入を計画している。今後の課題として本学や市内近郊で開催される試合情報や、イベントの積極的な情宣、本学独自の取り組みなどホームページを通して伝えていく。上記にも示したように、「スポーツ」をキーワードとした大学全体で取り組むプロジェクトなど、今後も充実した「チーム福大」のコンテンツは増加しつつある。スポーツブランディングの向上に向け、もっと地域に向けたスポーツ情報発信の起点となるには、学部内での更なる広報体制の充実が必要である。

8 国際交流、高大連携

森口 哲史・野口 安忠

■ 国際交流

<国際センター関連事業・プログラム>

- 1) 外国人留学生数
大学院研究生；1名
- 2) 学部留学生入学試験
スポーツ科学科；志願者2名、合格者0名、入学者0名
- 3) 海外研修・語学留学
健康運動科学科；3名（ウォッシュバン大学）
- 4) 福岡大学国際交流チーム（FIT）登録者
スポーツ科学科；1名

<体育・スポーツのエキスパート育成プログラム>

- 1) アスリート・コーチ育成プログラム（海外研修）
ハンドボール（ドイツ）；1名
サッカー（スペイン）；1名

<国際協力機構 JICA との連携>

- 1) スポーツ科学部生がスポーツ分野の学生ボランティアとしてボリビアに派遣され、サポート活動を行った。（野球；10名、サッカー10名）

<その他>

- 1) インターメディアイト・イングリッシュ GE クラスを履修した4名の学生が短期海外研修を行った。

<スポーツ健康科学研究科と釜山国立大学スポーツ科学研究科との学術交流>

（→ 研究科教育活動状況に掲載）

■ 高大連携

平成29年度、高大連携事業については附属若葉高等学校でゴルフ実習の授業支援と同校の体育祭を第二記念会堂で実施し、本学部の学部祭に生徒を招いて卒業生講話などのイベントを体験してもらった。附属大濠高等学校とは本学において模擬講義2回を実施した。協定校である早良高等学校では、4回の模擬講義を実施した。また、平成27年度に早良高等学校から母校外実習生受け入れの承諾が得られ、協力体制の構築はできていたが、平成28年度の対象者はいなかった。しかし、平成29年度は当初母校での教育実習をする予定であった学生が、教育実習の期間と部活動の大会が重なり、附属高校を含む教育実習協力校での実習受け入れが困難であったため、学部協定を締結している福岡県立早良高等学校に教育実習受け入れを学部から依頼し、同校に快諾していただけたことで教育実習と部活動の大会を両立が可能となり、高大連携が学生の充実した教育活動を支援した。

9 教職課程教育

柿山 哲治

■ 教職課程登録者数（2017年度）

学部	学科	17台	16台	15台	14台	13台以前	合計
スポーツ科	スポーツ科	173	149	129	100	0	551
	健康運動科	62	49	36	30	1	178
合計		235	198	165	130	1	729

■ 社会教育主事課程科目登録者数（2017年度）

学部	学科	17台	16台	15台	14台	13台以前	合計
スポーツ科	スポーツ科			0	1	0	1
	健康運動科			0	0	0	0
合計				0	1	0	1

■ 教員免許状取得状況（2017年度）

学部	学科	卒業生	免許状取得者数	免許状取得率
スポーツ科	スポーツ科	210	90	42.9%
	健康運動科	70	29	41.4%
合計		280	119	42.5%

■ 教員免許状（一種）一括申請者数（2017年度）

学部	学科	申請者数	中一種	高一種	申請件数
			保健体育	保健体育	
スポーツ科	スポーツ科	90	68	90	158
	健康運動科	29	25	29	54
科目等履修生（含大学院生）		1	1	1	2
合計		120	94	120	214

■ 教員免許状更新講座

講座名：『指導者なら知っておきたいコーディネーショントレーニングとバレーボールの指導法』

実施日：2017年8月10日（木） 受講者数：25名

担当者：泉原義郎助教、米沢利広教授

講座名：『保健体育教員なら知っておきたい健康・スポーツ科学』

実施日：2017年8月24日（木） 受講者数：25名

担当者：山口幸生教授、今村律子准教授、秀泰次郎助教

■ 教員採用試験合格者数

8名（福岡県・福岡市共合格者1名を含む）

内訳：福岡県中学校4名、福岡市中学校4名

10 研究科教育活動状況

檜垣 靖樹・川中 健太郎

まず、スポーツ健康科学研究科博士課程後期では、荒木真由美氏「ターンを利用したホームエクササイズに関する研究」、坂本誠氏「スロージョギングにおける自覚的運動強度と主観的ニコニコペース走の有効性に関する研究」、小見山高明氏「一過性運動が認知機能に及ぼす影響—血糖と脳への酸素供給からの検討—」、ならびに富賀裕貴氏「身体活動及び身体不活動が脳と骨格筋における神経型一酸化窒素合成酵素に及ぼす影響」の4名が学位審査の最終試験に合格し、博士の学位を取得した。また、この最終審査には副査として同志社大学の石井好二郎教授、筑波大学の征矢英昭教授が加わった。指導の労に対して心より感謝申し上げたい。前期課程では、8月に中間報告会、2月に修士論文発表会が開催され、最終的には12名が最終試験に合格した。その中で、中川洋成氏が参加した教員の採点で最高点を獲得し、優秀発表賞を受賞した。



福岡大学で行われた学術交流会の参加者の集合写真

国際交流に関しては、釜山国立大学スポーツ科学研究科との学術交流会が会場を隔年ごとに持ち回ることにより行われている。本年度は福岡大学で開催されて多くの教員・大学院生が参加した。本学大学院からは Mr. Makoto Sakamoto, Mr. Yuma Okabe, Mr. Yukiya Tanoue, Ms. Rina Goto の4名が、釜山側からは Ms. Song-ah Choi, Ms. Mi Kyung Han, Mr. Kyung-Wa Baek, Ms. Shanshan Wu, Ms. Ju-yeon Lee, Mr. Young-hoon Ko の6名が英語による研究発表を行った。また、本学の田中宏暁教授が”Slow Jogging: Natural running for weight-loss, health & performance benefits”とのテーマで特別講演を行った。本学術交流会が大学院生の国際学会での発表を拡大していく布石になることを願っている。発表会后、釜山からの参加者には福岡大学の体育・研究施設を見学していただいた。夜には、教員と学生に別れて懇親会が開催され、お互いの親睦を深めた。

11 就職・進路

(1) スポーツ科学部

柿本 真弓

平成 29 年度の全国大卒求人倍率は、1.78 倍（リクルートワークス研究所調べ）となっており、企業の採用意欲が高い状況が続いている。本学に寄せられた求人は 6,262 件、来学企業件数は 1,572 社であった。求人件数を業種別でみると、最も多かったのが卸売・小売業（1,211 件 19.4%）で、次いで医療・福祉（991 件 15.8%）、製造業（904 件 14.4%）、建設業（720 件 11.5%）、となっており、地域別でみると、福岡を含む九州圏内の求人が最も多く（2,358 件 37.7%）、関東地区に本社のある企業からの求人（1,982 件 31.6%）も多かった。

企業の広報活動・選考活動の開始時期は平成 28 年度と同様であったものの、採用活動の実情は毎年変化しており、活動のタイミングに苦慮する学生も見られたが、本学では、自己分析を円滑に進めるためのセミナーの開催、履歴書・エントリーシート添削指導、業界研究・企業研究の支援、OB・OG との接触の機会の創出、模擬面接など集団・個人面接への対応、インターンシップの情報提供など、あらゆる角度から、学生が有意義な就職活動を行えるよう支援している。このような支援や学生自らが活動した結果、就職率は 96.9%となり、前年度より 0.1 ポイント上昇した。

スポーツ科学部においては、全体的には 98.9%であり、男子は 98.5%、女子は 100%であった。その内訳は、サービス業 25.3%、卸売業・小売業 20.8%、教育・学習支援業 16.7%、製造業 9.0%、公務員 8.6%、金融業・保険業 5.3%、不動産業・物品賃貸業 3.7%、運輸業・郵便業 3.3%、建設業 2.9%、医療・福祉 2.0%、情報通信業 1.6%、その他 0.8%であった。

主な就職先は以下のとおりであった。

清水建設（株）、セキスイハイム九州（株）、伊藤ハム（株）、SMC（株）、大塚製薬（株）、タカラスタンダード（株）、（株）長府製作所、（株）デンソー九州、久光製薬（株）、（株）安川電機、リンナイ（株）、沖縄テレビ放送（株）、九州旅客鉄道（株）、西濃運輸（株）、アシックスジャパン（株）、アルファコミュニケーションズ（株）、九州三菱自動車販売（株）、西部ガスリビング（株）、（株）翔葉、（株）デンソーセールス、阪和興業（株）、福岡日産自動車（株）、ブリジストンタイヤジャパン（株）、（株）メガスports、（株）渡辺藤吉本店、（株）鹿児島銀行、第一生命保険（株）、（株）西日本シティ銀行、福岡県信用農業協同組合連合会、三井住友海上火災保険（株）、大和リビングマネジメント（株）、（株）トヨタレンタリース博多、（株）ホープ、（株）ホテル日航博多、アイ・ケイ・ケイ（株）、（株）サニクリーン九州、西鉄旅行（株）、（株）ジャクパ、（学）東福岡学園、（学）福岡大学、エフコープ生活協同組合、（公財）福岡県スポーツ振興センター、総合警備保障（株）、霧島市消防局、警視庁、刑務官、福岡県警、宮崎県庁、福岡県教員（中学校）、福岡市教員（中学校）など

前期課程修了者の就職先は、千葉ジェッツふなばし、公益財団法人健康・体力づくり事業財団、福岡大学病院、株式会社健康科学研究所、あさぎり町立あさぎり中学校、佐賀県立高志館高等学校、広島工業大学高等学校、南九州大学健康栄養学部管理栄養学科であった。博士後期課程への進学者はいなかった。

12 外部獲得資金実績

布目 寛幸

科学研究費 (H29 年度)

研究種目	代表者名	研究課題	金額
基盤研究(A)	田中 宏暁	健康寿命延伸と介護予防に寄与する運動プロトコルの開発とシステム構築	5,000,000
基盤研究(B)	川中 健太郎	骨格筋糖取り込みを高める栄養・運動処方に関する基礎研究 - ビタミンDに着目して -	3,700,000
基盤研究(B)	檜垣 靖樹	エピジェネティック修飾を介する骨格筋糖代謝の分子適応機構の解明	2,800,000
基盤研究(B)	今村 律子	アスリートの『観るチカラ』の不思議に迫る - 注視点揺動による視覚情報方略の解明 -	1,400,000
基盤研究(C)	上原 吉就	運動による HDL 代謝・機能の向上作用とミトコンドリア機能へおよび効果の検討	1,900,000
基盤研究(C)	柿山 哲治	マリアナ・ヤング女史が明治期に導入した Physical Culture の解明	1,100,000
基盤研究(C)	下園 博信	ボールゲームプレイヤーの知覚・認知能カトレーニングの開発および検討	1,100,000
挑戦的萌芽研究	川中 健太郎	インスリンと運動が脳の血糖取り込みに及ぼす影響	1,300,000
挑戦的研究(萌芽)	檜垣 靖樹	運動トレーニング及び肥満への適応は筋幹細胞にメモリーされるか?	1,600,000
若手研究(B)	樋口(信岡) 沙希重	短距離疾走速度と接地パラメータの関係とトレーナビリティ	800,000
若手研究(B)	伊賀 崇人	サッカーのボールインバクトにおける足部への力学的負荷を推定する新たなモデルの開発	2,200,000
若手研究(B)	泉原 嘉郎	小学校の体育授業で使える実践的コーディネーショントレーニングの開発と効果検証	1,000,000
若手研究(B)	塩瀬 圭佑	習慣的な糖質摂取量の違いが運動後の筋グリコーゲン回復の個人差に及ぼす影響	1,400,000
若手研究(B)	田村 雄志	棒高跳の助走におけるストライド調整メカニズムの解明	1,100,000
若手研究(B)	羅 成圭	ビタミン D と運動が骨格筋ミトコンドリア新生ならびに品質管理機能に及ぼす影響	1,000,000

受託研究 (H29 年度)

依頼者	研究代表者	研究課題	金額
柳井市長	田中 宏暁	柳井市運動による健康づくり効果分析業務	486,000
中村学園大学	田中 宏暁	メタボリック症候群の個々人の心音に基づく運動アドバイスシートの開発	16,200
春日市立天神山小学校	山口 幸生	児童の体力と心理社会的要因の関連性	186,000

研究助成寄付金 (H29 年度)

寄付者	研究代表者	研究課題	金額
(株)モリタファインケミカル	田中 宏暁	研究支援のため	1,782,000
福岡安全センター(株)	田中 宏暁	研究支援のため	639,000
新日本製薬(株)	田中 宏暁	研究支援のため	396,000
(株)ケイ・エス・オー	田中 宏暁	研究支援のため	5,640,535
ノバルティスファーマ(株)	上原 吉就	高比重リポ蛋白(HDL)による骨格筋ミトコンドリア機能向上作用とそのメカニズムの解明	450,000
新日本製薬(株)	田中 宏暁	研究支援のため(「有効性評価ヒト試験費用」)	540,000
第一三共(株)	上原 吉就	高血圧症に関する研究助成	1,800,000
田中 宏暁	檜垣 靖樹	研究支援のため	900,000
アサヒシューズ(株)	田中 宏暁	研究支援のため	450,000
(公財)中富健康科学振興財団	羅 成圭	研究助成のため	1,500,000
田中 宏暁	檜垣 靖樹	研究助成のため	900,000

共同研究 (H29 年度)

寄付者	研究代表者	研究課題	金額
(株)明治	川中 健太郎	3 種混合アミノ酸投与がエネルギー代謝能力に及ぼす影響	3,092,160
熊本県立大学	田中 宏暁	若年者の体重と日常生活パターンの季節変動に関する研究	0
大塚製薬(株)	檜垣 靖樹	運動後の炭酸含有糖電解質飲料の摂取が甘味に対する感覚および嗜好性に及ぼす影響	454,545
パナソニック(株)エコソリューションズ社	田中 宏暁	在宅高齢者の活動量履歴解析による認知症早期発見に関する研究	1,856,243
広島大学	川中 健太郎	持続血糖モニターを用いた食事と運動のタイミングが血糖調節に及ぼす影響に関する研究	0
(株)明治	川中 健太郎	3種混合アミノ酸投与がエネルギー代謝能力に及ぼす影響②	1,944,000
美津濃株式会社	布目 寛幸	フットサル用シューズにおけるシューズ-サーフェイス相互作用に関する研究	0
(株)明治	川中 健太郎	効果的な除脂肪体重の増量方法検討試験	4,070,000

13 関連資料一覧

- | |
|--|
| |
|--|
- ※ 福岡大学 大学案内
 - ※ 福岡大学スポーツ科学部 学部案内
 - ※ 福岡大学入試ガイド
 - ※ 福岡大学要覧

 - ※ 福岡大学スポーツ科学研究

 - ※ 福岡大学研究推進部年報 2017

 - ※ 教育開発支援機構年報（平成 29 年度）

 - ※ 体育・スポーツのエキスパート育成プログラム事業報告書（平成 29 年度）

 - ※ 福岡大学スポーツ科学部卒業論文抄録集（平成 29 年度）

 - ※ 教育実習報告書
 - ※ 教職事前実習報告書

 - ※ キャンプ実習、スケート実習、アクア実習、スキー実習報告（平成 29 年度）

 - ※ 大学生のスポーツと健康生活（大修館書店）

福岡大学
スポーツ科学部 大学院スポーツ健康科学研究科 年報
平成 29 年度 (2017) 第 3 号

発行日 平成 30 年 9 月発行

編集者 学部年報編集委員会

田口晴康 森口哲史 今村律子

発行者 福岡大学スポーツ科学部

〒814-0180 福岡市城南区七隈八丁目 19-1

TEL : 092-871-6631 (代) FAX : 092-865-6029

印刷所 有限会社新幸印刷

〒830-0045 福岡県久留米市小頭町 10-1-2F

TEL : 0942-38-0898

